

受賞おめでとうございます
新井宿自治会連合会 感謝状贈呈

《退任副会長》	岩澤 進吾	平林 宏一	原田 俊
	松浦カズ子	飯野 綾子	
《永年在職者》	福原 美子	平林千賀子	平林 謙
	間宮 章夫	栗原 基	吉田 一
	菅原 末子	安藤スギ子	岡田 京子
	阿部 勝代	文蔵 梅子	大見 静雄

(敬称略)

**「学院資料・村岡花子文庫 展示コーナー」
 東洋英和女学院内に開設**

昨年放送されたNHK連続テレビ小説『花子とアン』の原案の著者である村岡恵理さんから、展示コーナー開設のご案内をいただきました。

村岡花子が生前使っていた大森の自宅書斎を「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として、1991年(平成3年)より予約制で見学会を開いてまいりましたが、このたび、蔵書、原稿などの資料、愛用品を母校・東洋英和女学院へ寄贈いたしました。去る4月14日、東洋英和女学院内に展示コーナーが開設となり、一角に「書斎」も再現されております。どなたでも見学頂けますので、ぜひ足をお運びください。

「学院資料・村岡花子文庫 展示コーナー」
 展示場所：東洋英和女学院六本本校地
 本部・大学院棟 1階
 東京都港区六本木 5-14-40
 見学可能な時間：日曜、祝日、長期休暇中以外の
 9:00～20:00 (土曜日は～19:00)

主な著作
 随筆集：『腹心の友たちへ』『曲がり角のその先に』
 童話集：『たんぼの目』『桃色のたまご』

主な翻訳作品
 L.M.モンゴメリ作『赤毛のアン』シリーズ全十巻(新潮文庫)、『王子と乞食』(岩波文庫) など多数。

当時の子どもたちの花子さんの思い出

- いつも着物を着て良いと思う本を(これは読んどく本よ)とすすめてくれるやさしいおばあちゃん
- 自宅の家庭図書館「道雄文庫」で何時でも本が読めて庭が見える部屋で我を忘れて読んだ
- 花子さんが月に何回か美容院に顔を剃りにみえて終わると板塀に囲まれたなつかしい引き戸の玄関に送っていった思い出

編集後記

今年(平成27年)は戦後70年の節目の年にあたり、各方面で記念の行事が予定されています。本紙も戦後70年特集として「未来に語り継ぐ戦争体験」の特別寄稿を塚越恒爾氏にお願いしました。昭和20年4月15日、新井宿地区での激しい空襲の様子が臨場感あふれる文章で記されています。逃げ惑う人々の生々しい悲惨な状況を知ることができました。

平成26年度で、編集委員の山王三・四丁目自治会 山崎三津子さん、新井宿六丁目自治会 河原神風代さんが退任されました。長い間お疲れ様でした。代って、新任は三沢清太郎さん、松原美枝子さんにご参加いただきました。どうぞ宜しくお願いいたします。

(加藤編集委員)

講師を招いて「防災講習会」を開催

中央一丁目町会は3月15日に、オープンしたばかりの「さぼーとびあ」で、「防災講習会」を開催しました。町会の文化部長・湯浅氏の、スライドによる「東日本大震災ボランティア体験」の報告と、リスクウォッチ代表の長谷川祐子氏(元在日米海軍司令部地域統合消防隊予防課長)による、「大切な命を守るために～子供から大人まで」の講演がありました。講演内容は、災害発生時にどう身を守るかを具体的に伝え、特に子供だけの時にどうするかを、参加した子供に模擬体験をさせながら分かりやすく教えるもので、大変参考になるものでした。



善慶寺の堂

善慶寺にはその入り口近くに小川のような池があります。ここになんと堂が5月の終わりになると、か細い光を放って舞い跳ぶ光景が見られます。善慶寺 住職にお聞きしたところ、「平成15年ごろから飼いはじめてだんだんと数が増えて、7年ほど前から一般に公開しています。昔はどこにでもいる生き物でしたが、今は田舎に行ってもなかなか見ることができません。自然が失われていっている証です。堂の跳ぶ光景を大切にしていこうと、親、先祖を大切にすることと同じように、子や孫、そして後世に美しい自然を清く伝えるための架け橋になります。それはわたくし達の使命です。」と語られました。

「高頭信子氏絵画展」のお知らせ

川端龍子生誕130年を記念して、龍子記念館で、11月14日から特別展が開催されます。これに関連して、新井宿特別出張所でも龍子の愛弟子「高頭信子氏絵画展」を開催します。ぜひお越しください。

場所：新井宿特別出張所 3階会議室
 期間：11月16日～12月11日(土・日・祝日を除く)
 詳細は新井宿特別出張所へお問い合わせください。

発行 地域力推進新井宿地区委員会
 編集 「わがまち新井宿」編集委員会

中央四丁目町会	編集委員長	若生 一 順
山王三丁目東自治会	副編集委員長	荒木 秀 樹
中央一丁目町会	副編集委員長	齋藤 蓉 子
山王三・四丁目自治会	編集委員	三沢 清太郎
山王三丁目町会	編集委員	吉川 信 一
新井宿五丁目町会	編集委員	加藤 弘 子
新井宿六丁目町会	編集委員	松原 美枝子
新井宿七丁目町会	編集委員	落合 松 枝

.....共同編集.....

監修 新井宿自治会連合会
 事務局 大田区新井宿特別出張所
 大田区中央1-21-6 ☎ 3776-5391
<http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html>

「魚ハラダイス」
 入四小4年
 梁川佳代子さんの作品
 (はし絵)

**戦後70年特集
 ～新井宿地区の戦没者追悼施設のご紹介～**

まもなく太平洋戦争の終結から70年目の終戦記念日がやってきます。この節目の年に当たり編集委員会では、新井宿地区にある戦没者追悼施設を調査しました。調査対象は、明治維新以降に設置された追悼施設や慰霊碑に限定しました。ここでは、新井宿地区の8自治会・町会内に存在する追悼施設や慰霊碑のうち、3箇所をご紹介します。また、参考のために総務省のホームページ(HP)に掲載された大田区内の戦没者追悼施設も合わせてご紹介します。

- 1. 新井宿観音堂(総務省のHPに掲載あり)**
 ・所在地：新井宿六丁目町会(中央3-16-9)
 ・建立者：新井宿観音会
 ・建立年：昭和23年
 ・碑文【縁起】<濁点省略の漢文体、ルビ付き>
- 2. 春日神社「殉国碑」**
 ・所在地：中央一丁目町会(中央1-14-1)
 ・建立者：岩井文太郎 横山信太郎
 ・建立年：昭和41年
 ・碑文

昭和二十年大東亞戦争終ラ告ケ破却悲運ニ陥ル国民齊シク茫然タリ此間遠征ノ軍ニ伍シテ身ヲ犠牲ニスルモノ幾莫カ国内モ亦戦災ヲ被ルコト有史以來其類ヲ見サルノ厄ニ遇ヒ無シ命ヲ黄泉ニ走ラス者数知レス痛恨限リナシ此戦死戦没者ヲ追善供養セントテ本町内ニ観音会ヲ組シシ修善ノ人々相計リ昭和二十三年此地ニ仏堂ヲ建テ観音大士ノ尊像ヲ奉安シ其冥福ヲ祈ル

昭和三十三年福山義三郎ノ寄附ニヨリ仏堂再建シ尚宝塔ヲモ献納ス隅元居士ハ信仰厚ク浄土三部聖法花聖八巻ヲ淨寫シテ宝前ニ献セリ観音大士ハ自性清浄法性如来ト号シ奉ル然ニ大慈ヲ以テノ故ニ猶ホ菩薩ノ相ヲ現シ苦惱ノ衆生ヲ度シ樂邦ニ導キ玉フ有縁無縁ノ人々心ヲ大士ノ慈顔ニ托シテ成仏ヲ願フヘキナリ

会長 東秀二 副会長 宇田川庫吉 其他多数委員 芳名省略
 光教寺住職 藤沢捷徳 謹書

「大東亞戦争中 護国のため 生命を捧げられし 戦没者のみ霊のために この碑を 建立す」
 昭和41年6月17日
 贈 岩井文太郎
 横山信太郎

毎年、春日神社では秋祭の際に、この「殉国碑」の前で戦没者の御霊のために殉国慰霊祭がしめやかに執り行われています。

- 3. 熊野神社「明治州七八年従軍記念碑」**
 ・所在地：山王三丁目町会(山王3-43-11)
 ・建立者：不明
 ・建立年：不明
 ・碑文

「戦死者 間宮八兵衛 間宮平七 他四名」

明治37～38年の日露戦争に従軍した戦死者を追悼するために建立された記念碑と思われます。

- 4. そのほかの大田区内の戦没者追悼施設**
 ・殉難五君之碑(南馬込、円乗院)
 ・大田区戦没者慰霊塔(池上本門寺)
 ・池上平和観音(池上、曹禅寺)
 ・五十間鼻無縁仏堂(羽田、多摩川河口)
 ・入新井萬霊地藏尊(大森北、入新井公園)

今年もまもなく終戦記念日がやってきます。悲惨な戦争が再び起きないように大田区では、世界の恒久平和と人類の永遠の繁栄を願って、毎年「平和都市宣言記念事業」を実施しています。今年も8月15日に、多摩川河川敷で「花火の祭典」が開催されます。平和の尊さを次の世代に末永く語り継ぐ、「よすが」になってほしいと思います。

(敬称略)

<参考文献>大田区史および区史関係資料

ルビ作成：田中弥次右衛門(大田区文化財保護審議会委員)
 碑文提供：新井宿自治会連合会 渡部作次会長



◀平成27年 3月17日
 新井宿観音堂での
 春季大法要の様子

戦後70年 特集

未来へ語り継ぐ戦争体験

今回の戦争体験は、元NHKアナウンサーで大田文化の森運営協議会の第3代会長を勤められた塚越恒爾さんに寄稿していただきました。塚越さんは昭和15年にご両親とともに兵庫県から新井宿に転入され、入新井第二国民学校卒。ご存知の通り、国内外で活躍され、現在も大田文化の森で「音読の会」などの指導をなさっています。

特別寄稿

昭和20年4月15日のメモ ― 新井宿は劫火に包まれた

つかごし つねじ
中央四丁目町会 塚越 恒爾

“ゴワーン バリバリバリ グワーン”
深夜いきなりだった。雷音と紛う破裂音が頭上で、闇を貫いた。
超低空で飛来したB29が、新型クラスター焼夷弾を、空中で爆破させ、無数の焼夷弾をぶちまけたのだ。鋼鉄の筒は、窓を破り屋根を貫き、地面に突き刺さる。筒の中からはゼリー状のガソリンが飛び散る。辺り一帯は真昼の明るさになる。隣家の牛場邸(*1)のテニスコートは、一瞬にして赤い炎と黒い煙が立ち上る広場と化した。「まさしく火の海だ」私は呟いた。「それも悪魔の火だ」

その数分前まで、我ら一家4人は、防空壕の中で、京浜一帯の夜空を焦がす空爆におびえていたが、状況が皆目分からず、壕の扉を開けて庭に出た途端のことだった。
姉が叫ぶ。「ズボンが燃えている、早く池に……」
今まで私が立っていた防空壕の出口にも、50cm程の鋼鉄の筒が土にめり込み、赤黒い炎を吹き上げている。よろめくように浅い池に入る。今度は母親が悲鳴をあげた。「あああ……ミシン、ミシンが……」

当時、父親(*2)は公報こそ出ていなかったが、軍属として“研究をさせられていた長距離機・A26”に乗って、インド洋上で行方不明になっていた。母にとって、“池に立てたミシン”は、父亡き後の生計を託そうとした、一縷の頼りだったのだ。
慌てて、横倒しにしたミシンを立て直すが、器械はさぶ濡れ、役に立ちそうもない。

中学5年(第六高女)の、気丈な姉が叫ぶ。「そんなことより、命が先よ」
中学2年の私は、夏布団を池に浸して、肩に担ぐ。小柄な母は、幼い弟・貞爾を背負う。前日弟は、クギの出た板を踏み抜いて、脚は包帯でグルグル巻だ。「早く逃げないと……」
人気のない道にでる。向こう三軒、どの家も炎を上げている。
振り返ると、我が家は、すでに黒煙混じりの火の中だ。洋館建て家の周りは、ガラス張りのベランダだ。パリン、パリン……次々にガラスが弾け、炎が吹き出す。

「地獄の美しさだ」
つぶやく私を姉が叱る。「早くしないと、死ぬわよ」
母の防空頭巾を姉が引っ張る。私は左手で、弟の尻を押す。右手で引きずる水浸しのフンは重い。「ともかく、春日橋へ。あそこなら火は避けられるかも」
親子4人は、取りあえず改正道路・今の環七を目指した。数百メートルの直線だ。四丁目から一丁目、道路の両脇は、殆どが生け垣だ。どれもこれも、黒煙を発して燃えている。「まるで、サーカスのライオンだ」
つぶやく私に、また、姉の叱責が飛ぶ。

ひたすら、火の粉を払いながら、ようやく広い道に出た。右に曲がれば春日橋……もうすぐだ。そう思った時、警防団のメガホンが叫んだ。「春日橋は、機銃掃射でやられる。馬込橋へ向かって下さい」
母は呻いた。「馬込橋……もうダメ、どっかで休もう」
道ばたに座り込む母。泣き出す弟。「ごめんね。こんなときに“踏み抜き”なんかしちゃって……」

母は、弟を背負うと立ち上がった。「さ、馬込橋まで、急ぐよ」
用水路を挟んだ道路は、逃げ惑う人で溢れている。炎に煽られて、トタン板が、魔物のように空を舞う。歩く人は首をすくめてよける。遠く近くで火の粉が弾ける。すぐ前を赤子を背負った年配の女性が行く。姉が、私の背中を突いた。「なに」
聞き返す私に、姉は口に手を当てた。見ると、女性の背中血まみれ、背負われた嬰兒には首がない。……

私は黙って姉を見た。姉は首を振る。……今は言うのを止めよう……
追い越しながら、心の中で手を合わせる。辿り着いた馬込橋の影には、うずくまる人たちが満ち満ちていた。

「劫火」という言葉を思い出す……末世を迎えて、世界を焼き尽くす大火のことだ。……こんなことが許されるのか……言葉が失う。

一睡もせずに夜明けを迎えた。一人、二人、それぞれ我が家のあった方角へ散り始める。母の疲労は極限に達していた。姉が、弟貞爾を背負う。今の桜並木のあたりには、焼け残った家もある。内川に沿って歩く……新井宿はどうなった……佐伯山にぶつかって川は左に曲がる。この辺りの川沿いの家屋は軒並み、延焼を防ぐために「強制建物疎開(*3)」をさせられた場所だ。かろうじてその役目を果たしたかに見えるが、住み慣れた家を、目の前で取り壊された人の心は、如何ばかりだったろう。

視界が開けた。我が家の焼け跡が見える。裏庭のあたりに、何故か人垣が出来ている。中の一人が、私たちを見つけた。「アアア 塚越さん達、生きていたわー」
「ご心配を掛けまして」
遠くから挨拶を返す母親に、数人のもんぺ姿が走り寄る。

「無い……何も無い……東も南も、剥き出しの土台が続く……燃えた庭木……くすぶる煙を通して、かろうじて見えるのは、池上辺りが……」

近寄ると人垣の中には、あり合わせの布に覆われた焼死体があった。私たち4人と背格好の似た焼死体が4体、恐らく煙に巻かれたのだろう。「ここまで、やっと逃げてきたのにね……」
「でも私たち、てっきり塚越さんのご一家だと思ったのよ」
「だから、焼津に学童疎開(*4)している智津子さんに、どう話したらいいかってね」
近所の奥さんたちが、次々に母と抱き合う。どなただったろうか、飯ごうを振って走ってくる。「ともかく生きていてよかった、お祝いよ……」
心づくしの赤飯に、思わず涙がこぼれる。

焼け崩れ、まだ随所から煙があがる我が家を背に、我らは裏庭のご遺体に手を合わせた。とりわけ母は、いつまでもしゃがんでいた。体も心も、動けないのだ。……一月前の3月10日、大家族だった母の親族の殆どは下町で、その大半が焼死した。優しくした叔母、叔父、従兄弟たちの顔が浮かんでくる……

私は、母の背中をゆっくりさすった……出来ることはそれしかなかった。

【注釈】

(*1) 牛場 信彦(うしば のぶひこ)
生年月日：明治42年11月16日
昭和時代の外交官。昭和45年には駐米大使となり、沖縄返還、日米繊維交渉などにとりくんだ。

(*2) 塚越 賢爾(つかごし けんじ)
塚越恒爾の父で昭和期の航空機関士
生年月日：明治33年11月8日
東京市麹町区で、父 金次郎、母 エミリー・セラー(英国人)の長男として誕生した。賢爾の父 金次郎は、明治の終わり頃(100年以上前)、荏原郡入新井村新井宿(現所在地)に転入した。
経歴：昭和2年東京朝日新聞社に入社。

12年同社が試みた亜欧連絡飛行の“神風号”に搭乗、飯沼正明操縦士と共に4月6日午前2時12分4秒、東京・立川飛行場を離陸、日本時間の10日午前0時30分、ロンドンのクロイドン飛行場に着陸した。国産機による初の国際航空世界新記録(94時間17分56秒)を樹立、神風ブームを巻き起こした。太平洋戦争さなかの18年、日独軍事連絡便としてA26型機でベルリンに向かう途中、消息を絶った。
世界新記録樹立を記念して、地元の南町会(会長：岩井文太郎)の5百余名が春日神社に集合して塚越家まで提灯行列をしてお祝いしたことが当時の東京朝日新聞(昭和12年4月11日付)に掲載されている。

(*3) 強制建物疎開(建物強制疎開ともいう)
疎開というと学童疎開が有名だが、実は建物の疎開もあった。木造住宅の多かった日本では、焼夷弾を落とされると、あつという間に火が燃え広がってしまうので、人力で強制的に建物を壊し、延焼を防ぐようにしたのが強制建物疎開である。
新井宿地区でも疎開の対象となったエリアが多くあり、昭和20年春、村岡花子の親友片山廣子の邸(大森区新井宿三丁目)も疎開のため撤去された。

(*4) 学童疎開
戦争が敗色濃厚になった昭和19年6月30日、政府は学童集団疎開の要綱を閣議決定する。この要綱に従い、大都市では国民学校(小学校)に対して空襲の危険の少ないと思われる地域に子どもたちを疎開させた。当時大森区の入一・入二・入三(現山王)・入四の各国民学校は静岡県に集団疎開した。

その後、さらに戦況が悪化し昭和20年6月に岩手県・富山県に再疎開することになる。
当時の子どもたちの日記には、「大きなお風呂に毎日のように入れて嬉しい」と記されている。受け入れ側の人たちへの心遣いが窺われる。

はじめは遠足のようにはいしゃいでいた子どもたちも、日が経つにつれて寂しさ、ひもじさが募り、脱走を囀り捕まるもの、長期の集団生活でいじめにあうものなど、戦後の聞き取りからは「もう行きたくありません」という、疎開当時は口にすることができなかった内容が記されている。

(敬称略)

<参考文献>

・大田区史および区史関係資料
・『美貌なれ昭和』(深田祐介著、1985、文春文庫)
・『平和のいしずえ』(大田区教育資料調査室編集、1994)